

# コンテキストの構造

## ——語彙・構文コンテキスト——

岡 部 匠 一

### 1. 定位と展望

本稿は、これまでに筆者が機会をえて発表してきたコンテキストについての考察<sup>1)</sup>を承けるものであり、直接には、《コンテキストの構造——構文コンテキストについて——》<sup>2)</sup>に続くものである。

「能率的読書法」の著者たちは、我々が、分らない語の意味をきめるのによく使う手がある。推測することである。この手は、正しくは、コンテキストから意味を見つけだすこと、として知られている。<sup>3)</sup>（傍点筆者）と述べている。それでは、＜コンテキストとはなにか、その型態と機能はいかなるものか＞を、英語に具体的資料を求めて考察しよう。《コンテキストと語義》の「1. 定位と展望」で援用した OED, Webster 3NID のコンテキストの定義<sup>4)</sup>に続いて、本稿では、英語学徒が座右に置いて、駆使すべき辞書とも言われている SOD<sup>5)</sup>について、コンテキストの意味を探ることから始めよう。コンテキストの語義として、SOD は、The parts which immediately precede or follow any particular passage or text and determine its meaning（ある特定の一節あるいは一文章の、すぐ前、あるいはすぐ後にあって、その特定の一節、あるいは一文章の意味を規定する部分）であるとし、次の用例を記載している。To this I answer plainly according to all the light that the contexts afford in this matter.（私は、この問題については、コンテキストが与えるあらゆる手がかりによって、はっきりと答えます。）次に、アメリカ英語におけるコン

1. 岡部, “コンテキストについて,” 英語: 研究と教授, (東京, 1963), pp. 24-27.  
——, “コンテキストと語義,” 信州大学文理学部紀要, 1964, 14: 38-47.  
——, “ことばとコンテキスト,” 中島教授記念論文集, 東京: 研究社, 1965, pp. 253-261.  
——, “構文コンテキスト,” 信州大学文理学部紀要, 1965, 15: 36-41.  
——, “コンテキストと語彙,” かりばね, 1965, 5: 5-10.
2. 信州大学人文学部紀要, 1: 27-35.
3. G. D. Spache & P. C. Berg, “Analyzing Difficult Words,” in *The Art of Efficient Reading* (New York, 1966), p. 149.
4. OED; the parts which immediately precede or follow any particular passage or ‘text’ and determine its meaning.; Webster 3NID; the part or parts of a written or spoken passage preceeding or following a particular word or a group of words and so intimately asassociated with them as to throw light upon their meaning.
5. ‘……the student should now try to cultivate the habit of using *The Shorter Oxford Dictionary*.’ (C. L. Wrenn, *The English Language* (東京, 1944 repr.), p. 188.

テキストを、Webster の New World Dictionary (New York, 1964 impr.) に探ると、コンテキストとは、‘part of a sentence, paragraph, discourse, etc. that occur just before and after a specific word or passage, and determine its exact meaning.’ (特定の語、あるいは一節のすぐ前とすぐ後に起り、その語、あるいは一節の正確な意味を規定する文、一章節、一論文の一部分) とある。また、この意味での用例としては、It is unfair to quote this remark out of its context. (このことばを、そのコンテクストから抜きだして引用することは正しくない。) があげられている。さらに、SOD にはあげられていないが、Webster には、コンテキストの第2義として、the whole situation, background or environment relevant to some happening or personality.

(ある事象、あるいは、人に関係がある全体的状況、背景、環境) が記載されている。それゆえ、SOD と NWD の教えるコンテキストの意味を、それらにあげられている用例をも参考にしてまとめてみると、〈コンテキスト〉とは、「ある特定の語、語群、文、一章節、一作品(談話、講義、説教、論文)等の、すぐ前、および(あるいは)、すぐ後にあって、これらの意味を規定する部分」である。さらに、コンテキストの今一つの意味は、NWD によれば、「ある事象、ある人物に関係がある全体的な状況、背景、環境」でもある。ここで、今述べた二つのコンテキストをまとめると、コンテキストには、二つの変種が考えられる。一つは、言語的資料のみで構成されているものである。すなわち、第一種のコンテキストは、「ある特定な要素の直前、あるいは直後にあって、その特定要素の意味を規定する部分」である。第二種のコンテキストは、非言語的資料で構成され、ある事象、あるいは人物に関係ある全体的な状況、背景」である。すなわち、第一種の言語的資料により作られるコンテキストを構成する〈言行為<sup>6)</sup>〉は、第2種の非言語的資料による〈現実の事象<sup>6)</sup>〉によって取り巻かれていると考えられる。ここで、我々は、言語的資料のみによって構成されている第一種のコンテキストを、〈内言語コンテキスト〉と名づけ、非言語的資料からなる第2種のコンテキストを、〈外言語コンテキスト〉と呼ぶことにする。この〈内言語コンテキスト〉と〈外言語コンテキスト〉は、文体の分析で用いられる〈micro-context〉と〈macro-context<sup>7)</sup>〉とは異なることに注意されたい。macro-context は、‘作品全体’を含み、また‘一流派’、‘一時代’、‘全ジャンル’をも含む概念であるから、内言語的な言語材料と、外言語的な事象、人物が混在している、意味決定、あるいは分析の枠と考えられるからである。

## 2. 外言語コンテキストと内言語コンテキスト

次に、外言語コンテキストから始めて、具体例について考察してみよう。例えば、‘Look

6. ‘……but we, who are studying language, will naturally distinguish between the act of speech and other occurrences, which we shall call *practical events*,’ (Bloomfield, *Language*, 1955 impr., p. 23).

7. Quoted from M. Riffaterre, ‘Stylistic Context’, *Word*, xvi (1960) by S. Ullmann, *Language and Style* (Oxford, 1964), p. 127.

8. S. Ullmann, *ibid.*, p. 128.

at the table.' という文を考えてみると、この文は、いくつかの異なった意味をもっている。この発話の意味としては、「ある事件（'Look at the table.' という「言行為」）に関係ある「場面全体」」、すなわち、外言語コンテキストによって、「食卓を見よ」、「数表を見よ」、「時間表を見よ」のいずれかが実現されることになる。次に、言語資料のみによって構成されている内言語コンテキストについて考察してみよう。 a. Yellow is my favorite color. (黄色は私の好きな色だ。) b. Newspaper yellow with age. (時間が経つと新聞は黄色くなる) c. I like yellow dress. (私は黄色い服が好きだ。)<sup>9)</sup> を比較すると、yellow の、それぞれの意味の実現は、a. b. c. のそれぞれの文の中の yellow の前、あるいは後に起る要素（語、語群）によって行なわれていると考えられる。ここで我々は、その意味が実現される要素を、「被規定素」、と名付け、「被規定素」の意味の実現に必要な要素を「規定素」、さらに、被規定素の意味の実現に必要な最小の要素を、「最小規定素」と呼ぶことにする。

次に、内言語コンテキストにおける被規定素、規定素、最小規定素を具体例について考えてみよう。And Lord Castlewood must bear the cruel charge of having been for once in his life tipsy. (そしてカースルウッド卿は、一生に一度だけ酔っぱらったという残酷な非難に耐えなければならない。) この文では、被規定素 charge の語義を、「非難」、「責め」の意味に規定するには、一見、この文全体、すなわち、全内言語コンテキストを必要とするようにみえる。<sup>10)</sup> しかし、よく見ると、被規定素 charge の語義を「正確に」、「非難」に規定するに必要な最小の要素（最小規定素）は、the charge, of having been, tipsy の三要素のみである。

外言語コンテキストは、先にみたように、「ある事象、あるいは、ある人物に関係がある全体的状況背景、環境」であるから、これの正確な分析と記述には、「話し手の世界に存在するあらゆるものについての、科学的に正確な知識を必要とする。」<sup>11)</sup> ゆえに、外言語コンテキストの内容は、「人間の経験の総体」<sup>12)</sup> であるとも考えられる。従って、コンテキスト研究の現状では、我々の分析と記述の対象を、言語資料のみによって構成されている＜内言語コンテキスト＞に限ることにする。

### 3. 内言語コンテキスト——語彙コンテキスト——

具体例から入ろう。The psychology of the individual's grammar is by no means always the psychology of the grammar of the social body. (個人の文法

9. D. W. Brown, W. C. Brown & B. Bailey, "Grammatical Distribution," in *Essays on Language & Usage*, 1963, p. 219.

10. '.....That is to say, the hearer is aided in his decoding of the message by the total context of the message.' (J. B. Carroll, *The Study of Language*, 1955, p. 91).

11. 'In order to give a scientifically accurate definition of meaning for every form of a language, we should have to have a scientifically accurate knowledge of everything in the speaker's world. (L. Bloomfield, *Language*, 1950 impr., p. 139). [イタリツク筆者]

12. 'The substance of content is, of course, the whole of human experience.' (H. A. Gleason, *An Introduction to Descriptive Linguistics*, 1955, p. 13). [イタリツク筆者]

の心理は、決して、必ずしも、社会集団の文法の心理ではない。)の文において、被規定素 *body* の語彙の意味が、*body* の色々な語彙意味、‘身体’、‘死体’、‘群’等のうちの一つ、‘群’の意味に規定されるために必要な最小の要素——最小規定素——は、この文では、形容詞として *body* に先行している語 *social* であることは明らかである。このように、＜被規定素 (*body*) に対し、最小規定素として働らく要素が一語 (*social*) である場合の意味規定の場＞を、我々は、第一型語彙コンテキストと名付ける。もちろん、第一型語彙コンテキストには、色々な変種が考えられる。例えば、*Her body ached with the fancied quickening of unborn life.* (まだ生れてこない子供の胎動を想像するだけで彼女の身体はうずいた。)の文では、被規定素 *body* に対する最小規定素 *ached* は、一語ではあっても、先にあげた、*yellow* を被規定素とする、*a, b, c,* の文の場合とは異なり、主語に対する述語動詞として表われている。

次に、第2型語彙コンテキストの具体例について考えよう。When I say ‘we’ my dear, returned the father, I mean mankind in general; the human race considered as a body, and not as an individual. (私が‘我々’というときには、一つの集団として考えられた人類、人間一般のことを言っているの、個人としての人類のことを言っているのではない、と父は言った。)この文では、被規定素 *body* の語彙の意味を実現するのに必要な最小規定素は、*body* を含むイタリックの全語群である。すなわち、＜最小規定素として働らく要素が、一語ではなく、文、あるいは、語群全体＞である。このように、＜語群、あるいは文全体の語彙の意味で作られる意味規定の場＞を、我々は、第2型語彙コンテキストと呼ぶことにする。

#### 4. 内言語コンテキスト——構文コンテキスト——

語彙コンテキストにならって、具体例から考察を進めよう。文、*I can not make them understand me.* (私は、彼等に私の言うことを分らせることができない。)について考えてみる。この文において、動詞 *make* の語彙の意味を‘(…に)…させる’に規定しているのは、補足語 *them understand* の語彙の意味ではなくて、この語群が、この文中で持つようになった構文的機能である。これをコンテキスト論の言葉でいうと、「この文の被規定素 *make* の意味を、①作る、*Bird make their nests.* (鳥は巣を作る。); ②……する、*You will only make bad worse.* (君はますます事態を悪化させるだけだろう。); ③行う、*He made his simple morning meal.* (彼は簡単に朝めしをすませた。)等の意味ではなくて、④……せしめる (……させる) の意味に規定する規定素は、「*them understand* のもつ構文機能である」と言えよう。この事実、次の類例をみれば明らかであろう。*He made me do so.* (彼は私にそうさせた。); *Why, what makes you think that.* (まあ、なんだってそんなことを考えるのか。); *I will make my servant clean your boots.* (召使に靴をみがかせましょう。); *They made him repeat it.* (彼等は彼にそれをくり返させた。)これらの例からまとめると、構文コンテキストとは、「ある発話、あるいは文中において、ある被規定素の意味の実現に働らく規定素が、その発話、あるいは文中のある要素(語、あるいは語群)の構文的機能によって作られる意味規定力であるような意味規定の場」である。このような構文コンテキストを、我々は、第1型構文コンテキストと名づけよう。

at the table.' という文を考えてみると、この文は、いくつかの異なった意味をもっている。この発話の意味としては、「ある事件（'Look at the table.' という「言行為」）に関係ある「場面全体」、すなわち、外言語コンテキストによって、「食卓を見よ」、「数表を見よ」、「時間表を見よ」のいずれかが実現されることになる。次に、言語資料のみによって構成されている内言語コンテキストについて考察してみよう。 a. Yellow is my favorite color. (黄色は私の好きな色だ。) b. Newspaper yellow with age. (時間が経つと新聞は黄色くなる) c. I like yellow dress. (私は黄色い服が好きだ。)<sup>9)</sup> を比較すると、yellow の、それぞれの意味の実現は、a. b. c. のそれぞれの文の中の yellow の前、あるいは後に起る要素（語、語群）によって行なわれていると考えられる。ここで我々は、その意味が実現される要素を、「被規定素」と名付け、「被規定素」の意味の実現に必要な要素を「規定素」、さらに、被規定素の意味の実現に必要な最小の要素を、「最小規定素」と呼ぶことにする。

次に、内言語コンテキストにおける被規定素、規定素、最小規定素を具体例について考えてみよう。And Lord Castlewood must bear the cruel charge of having been for once in his life tipsy. (そしてカースルウッド卿は、一生に一度だけ酔っぱらったという残酷な非難に耐えなければならない。) この文では、被規定素 charge の語義を、「非難」、「責め」の意味に規定するには、一見、この文全体、すなわち、全内言語コンテキストを必要とするようにみえる。<sup>10)</sup> しかし、よく見ると、被規定素 charge の語義を「正確に」、「非難」に規定するに必要な最小の要素（最小規定素）は、the charge, of having been, tipsy の三要素のみである。

外言語コンテキストは、先にみたように、「ある事象、あるいは、ある人物に関係がある全体的状況背景、環境」であるから、これの正確な分析と記述には、「話し手の世界に存在するあらゆるものについての、科学的に正確な知識を必要とする」<sup>11)</sup> ゆえに、外言語コンテキストの内容は、「人間の経験の総体」<sup>12)</sup> であるとも考えられる。従って、コンテキスト研究の現状では、我々の分析と記述の対象を、言語資料のみによって構成されている＜内言語コンテキスト＞に限ることにする。

### 3. 内言語コンテキスト——語彙コンテキスト——

具体例から入ろう。The psychology of the individual's grammar is by no means always the psychology of the grammar of the social body. (個人の文法

9. D. W. Brown, W. C. Brown & B. Bailey, "Grammatical Distribution," in *Essays on Language & Usage*, 1963, p. 219.

10. '.....That is to say, the hearer is aided in his decoding of the message by the total context of the message.' (J. B. Carroll, *The Study of Language*, 1955, p. 91).

11. 'In order to give a scientifically accurate definition of meaning for every form of a language, we should have to have a scientifically accurate knowledge of everything in the speaker's world.' (L. Bloomfield, *Language*, 1950 impr., p. 139). [イタリツク筆者]

12. 'The substance of content is, of course, the whole of human experience.' (H. A. Gleason, *An Introduction to Descriptive Linguistics*, 1955, p. 13). [イタリツク筆者]

の心理は、決して、必ずしも、社会集団の文法の心理ではない。)の文において、被規定素 *body* の語彙的意味が、*body* の色々な語彙意味、‘身体’、‘死体’、‘群’等のうちの一つ、‘群’の意味に規定されるために必要な最小の要素——最小規定素——は、この文では、形容詞として *body* に先行している語 *social* であることは明らかである。このように、＜被規定素 (*body*) に対し、最小規定素として働らく要素が一語 (*social*) である場合の意味規定の場＞を、我々は、第一型語彙コンテキストと名付ける。もちろん、第一型語彙コンテキストには、色々な変種が考えられる。例えば、*Her body ached with the fancied quickening of unborn life.* (まだ生れてこない子供の胎動を想像するだけで彼女の身体はうずいた。)の文では、被規定素 *body* に対する最小規定素 *ached* は、一語ではあっても、先にあげた、*yellow* を被規定素とする、*a, b, c,* の文の場合とは異なり、主語に対する述語動詞として表われている。

次に、第2型語彙コンテキストの具体例について考えよう。When I say ‘we’ my dear, returned the father, I mean mankind in general; the human race considered as a body, and not as an individual. (私が‘我々’というときには、一つの集団として考えられた人類、人間一般のことを言っているのだから、個人としての人類のことを言っているのではない、と父は言った。)この文では、被規定素 *body* の語彙的意味を実現するのに必要な最小規定素は、*body* を含むイタリックの全語群である。すなわち、＜最小規定素として働らく要素が、一語ではなく、文、あるいは、語群全体＞である。このように、＜語群、あるいは文全体の語彙的意味で作られる意味規定の場＞を、我々は、第2型語彙コンテキストと呼ぶことにする。

#### 4. 内言語コンテキスト——構文コンテキスト——

語彙コンテキストにならって、具体例から考察を進めよう。文、*I can not make them understand me.* (私は、彼等に私の言うことを分らせることができない。)について考えてみる。この文において、動詞 *make* の語彙的意味を‘(…に)…させる’に規定しているのは、補足語 *them understand* の語彙的意味ではなくて、この語群が、この文中で持つようになった構文的機能である。これをコンテキスト論の言葉でいうと、「この文の被規定素 *make* の意味を、①作る、*Bird make their nests.* (鳥は巣を作る。); ②……する、*You will only make bad worse.* (君はますます事態を悪化させるだけだろう。); ③行う、*He made his simple morning meal.* (彼は簡単に朝めしをすませた。))等の意味ではなくて、④……せしめる(……させる)の意味に規定する規定素は、「*them understand* のもつ構文機能である」と言えよう。この事実は、次の類例をみれば明らかであろう。*He made me do so.* (彼は私にそうさせた。); *Why, what makes you think that.* (まあ、なんだってそんなことを考えるのか。); *I will make my servant clean your boots.* (召使に靴をみがかせましょう。); *They made him repeat it.* (彼等は彼にそれをくり返させた。))これらの例からまとめると、構文コンテキストとは、「ある発話、あるいは文中において、ある被規定素の意味の実現に働らく規定素が、その発話、あるいは文中のある要素(語、あるいは語群)の構文的機能によって作られる意味規定力であるような意味規定の場」である。このような構文コンテキストを、我々は、第1型構文コンテキストと名づけよう。

## 5. 構文コンテキスト——第2型(1)——

しかし、構文コンテキストは、先に考察した、I can not make them understand me. (私は彼等に私の言うことを分らせることができない。)のような純粋な形で表われることは少ない。はじめに、次の文が作るコンテキストの分析を試みよう。These people made good engineers. (これらの人々は、りっぱな技師になった。)この場合に、被規定素 made の語彙的意味を、be 動詞の連結詞的な意味、<sup>13)</sup>‘……になった’に規定するコンテキストを作る被規定素は、made の右側要素、good engineers でないことは明らかである。なぜならば、made は、自・他両用動詞であるから、<sup>14)</sup>‘……になった’という、その自動詞的語彙意味が実現されるためには、まず第一に、被規定 good engineers を、目的語ではなくて補語であると規定する構造的指標がこの文の中に存在しなければならない。なぜならば、すでに述べたように、そのような構造的指標が作る意味規定の場——構文コンテキストの働らき——によって、made の他動詞的意味の排除が行われ、その自動詞的意味が実現されてくるからである。しかし、good engineers を補語と規定する構造的指標はこの文中にないので、made の他動詞的意味を排除するような意味規定の場——構文コンテキスト——が形成されない。それゆえ、この文では、被規定素 made の語彙的意味は、その他動詞的意味(‘……を作る’, etc.), あるいは、自動詞的意味(‘……になる’, etc.) のいずれにも決定<sup>15)</sup>されないことになる。さらに、規定素 engineers の語彙的意味、および語型のいずれも、この文の被規定素 made の文法的意味(自動性)、および、語彙的意味(に……なった)を規定する意味の場——語彙・構文コンテキスト——を作らない。

ここで、「規定素 engineers の語型が、被規定素 made の文法的意味を規定しない」ということについて、今少し詳しくこの文を見てみよう。一般に英語では、ある語、あるいは語群が、それらの語型的、および、それらの構文型的な差異によって、その当該要素、すなわち、上の文では good engineers を、直接目的語であるか、あるいは補語であるか、<sup>16)</sup>いずれかに決定できない場合がある。すなわち、補語として働らく要素も、目的語として働

13. Zellig S. Harris, "Transformational Theory," *Language*, 44 (1964): 364.
14. 'patterns of form and arrangement' (C. C. Fries, *Structure of English*, 1957, 1961 impr. p. 56, fn. 3); 'the necessary signals of structural meaning' (*ibid.*, p. 110).
15. ここで '語型' は、ネルソン・フランシスのいう '屈折' の意味で用いることにする。'……compare the sentences "the dog loves the man" and "the dogs loved the men." Here the words are the same, in the same order, with the same function-words in the same positions. But the forms of the three words having lexical meaning have been changed: "dog" to "dogs," "loves" to "loved," and "man" to "men." (W. Nelson Francis, "Revolution in Grammar," in D. Levin (Ed.), *Aspects of American English*, 1962, p. 33).
16. '構文型的' は、ここでは、ネルソン・フランシスのいう '語順のもつ構造的意味' (the structural meaning of word order) の意味で使うことにする。cf. *ibid.*, p. 32.
17. 'Neither appear nor hit is 'ambiguous', in *He appeared a fool or He hit a fool*; but feel in *He felt a fool* is 'ambiguous'……Hence we can not tell, from the sentence itself whether a speaker intends us to take *fool* in *He felt a fool* as referring to the same person as *he*, or to a different person, or to both;' Sledd, *Review of Whitehall, Structural essentials of English*; Loyd and Warfel, *American English in its cultural setting*; Roberts, *Patterns of English, Language*, 33: 267 (1957).



らく要素も、いずれも、ふつうの語順をもつ文 (S+V+C; S+V+O) においては、動詞の右側要素となり、その語型も、構文コンテキストを形成する型態的・構文的指標を与えない通格型をとっているからである。しかし、先にあげた文、*These people made good engineers.* (これらの人は立派な技師になった。) に対して、*These people made good engineers out of these young men.* (これらの人は、この若い人たちを立派な技師にした。〔直訳。若者から技師を作った〕) の文を考えてみる。この文でも、前の文と同じく、被規定素として *made* をとる。すると、この文では、前置詞句のもつ語彙の意味が作る意味規定の場——語彙コンテキスト——の働らきによって、被規定素 *made* の語彙の意味は、その自動詞的語彙意味の一つ、‘……作った’ に規定されることになる。ここで逆に類推して、この前置詞句の欠除が、被規定素 *made* の他動詞的語彙意味を実現する構文コンテキストを作ると考えることは正しくない。例えば、文、*These people made good engineers for these oil-field.* (これらの人たちは、これらの油田の立派な技師になった。) においては、前置詞句 *for these oil-fields* の存在にも拘らず、被規定素 *made* は、‘……になった’ という語彙の意味を実現しているからである。それゆえ、前の文、*These people made good engineers.* において、被規定素 *made* の自動詞的語彙意味の一つ ‘……になった’ が実現されるのに必要なことは、被規定素 *good engineers* が、補語と規定されることである、ということが、改めて確認される。しかし、規定素 *good engineers* を補語と規定するのに必要な意味規定力は、この被規定素 *good engineers* をこえた、「この文に登場する人物に関係がある場面」(NWD)、すなわち、「この文の要素、*these people* と *good engineers* は同一対象物 (同一人物) を指す」という外言語コンテキストに求められなければならない。<sup>18)</sup> この種のコンテキストは、第1型構文コンテキストの一変種であり、我々は、このコンテキストを、〈第1型構文コンテキスト・語彙・場面拘束型〉と呼ぶことにする。従って、文、*These people made good engineers.* に対するコンテキストの分析を、(被規定素を *made* にとると)、「この文では、〈言行為の場〉を作る外言語コンテキストの働らきによって、初めて、規定素 *good engineers* 語型および構文型の作る構文コンテキスト、および、*good engineers* の語彙の意味によって作られる語彙コンテクが複合して働らき、被規定素 *made* の自動詞的語彙意味の一つ、‘……になる’ が実現されている」と考えられる。すなわち、第一段階では、〈言行為の場〉として表われる外言語コンテキストによって、〈*These people* と *good engineers* が同一人物を指す〉ことが明らかにされ、これによって、語群 *good engineers* が目的語ではなく、補語であることが規定されてくる。すると、第二段階では、〈*good engineers* は補語〉という構文型が作る意味規定の場——構文コンテキスト——の働らきによって、被規定素 *made* の他動詞的語彙意味群は排除されて、その自動詞的語彙意味群が実現されてくる。第3段階では、*good engineers* と、被規定素 *made* の二要素が作る、それぞれの語彙の意味の相互排除・規定作用——語彙コンテキストの働らき——によって、被規定素 *made* が、この文においてもつべき正しい語彙意味、‘……になった’ が実現されることになる。しかし、標準的な構文コンテキストの型態と機能の考察対象となる文、あるいは発話では、その文、あるいは発話を構成している内言語

18. O. Jespersen, *Essentials of English Grammar* (London, 1933, 1952 impr.) p. 138.

19. C. C. Fries, *Structure*, p. 191.



## 5. 構文コンテキスト——第2型(1)——

しかし、構文コンテキストは、先に考察した、I can not make them understand me. (私は彼等に私の言うことを分らせることができない。) のような純粋な形で表われることは少ない。はじめに、次の文が作るコンテキストの分析を試みよう。These people made good engineers. (これらの人々は、りっぱな技師になった。) この場合に、被規定素 made の語彙の意味を、be 動詞の連結詞的な意味、‘……になった’ に規定するコンテキストを作る被規定素は、made の右側要素<sup>13)</sup>、good engineers でないことは明らかである。なぜならば、made は、自・他両用動詞であるから、‘……になった’ という、その自動詞的語彙意味が実現されるためには、まず第一に、被規定 good engineers を、目的語ではなくて補語であると規定する構造的指標がこの文の中に存在しなければならない。なぜならば、すでに述べたように、そのような構造的指標が作る意味規定の場——構文コンテキストの働き——によって、made の他動詞的意味の排除が行われ、その自動詞的意味が実現されてくるからである。しかし、good engineers を補語と規定する構造的指標はこの文中にないので、made の他動詞的意味を排除するような意味規定の場——構文コンテキスト——が形成されない。それゆえ、この文では、被規定素 made の語彙の意味は、その他動詞的意味(‘……を作る’, etc.), あるいは、自動詞的意味(‘……になる’, etc.) のいずれにも決定されないことになる。さらに、規定素 engineers の語彙の意味、および語型のいずれも、この文の被規定素 made の文法的意味(自動性)、および、語彙の意味(に……なった)を規定する意味の場——語彙・構文コンテキスト——を作らない。

ここで、「規定素 engineers の語型が、被規定素 made の文法的意味を規定しない」ということについて、今少し詳しくこの文を見てみよう。一般に英語では、ある語、あるいは語群が、それらの語型的、および、それらの構文型的な差異によって、その当該要素、すなわち、上の文では good engineers を、直接目的語であるか、あるいは補語であるか、いずれかに決定できない場合がある。すなわち、補語として働らく要素も、目的語として働

13. Zellig S. Harris, "Transformational Theory," *Language*, 44 (1964): 364.
14. 'patterns of form and arrangement' (C. C. Fries, *Structure of English*, 1957, 1961 impr. p. 56, fn. 3); 'the necessary signals of structural meaning' (*ibid.*, p. 110).
15. ここで '語型' は、ネルソン・フランシスのいう '屈折' の意味で用いることにする。'……compare the sentences "the dog loves the man" and "the dogs loved the men." Here the words are the same, in the same order, with the same function-words in the same positions. But the forms of the three words having lexical meaning have been changed: "dog" to "dogs," "loves" to "loved," and "man" to "men." (W. Nelson Francis, "Revolution in Grammar," in D. Levin (Ed.), *Aspects of American English*, 1962, p. 33).
16. '構文型的' は、ここでは、ネルソン・フランシスのいう '語順のもつ構造的意味' (the structural meaning of word order) の意味で使うことにする。cf. *ibid.*, p. 32.
17. 'Neither appear nor hit is 'ambiguous', in *He appeared a fool* or *He hit a fool*; but feel in *He felt a fool* is 'ambiguous'……Hence we can not tell, from the sentence itself whether a speaker intends us to take *fool* in *He felt a fool* as referring to the same person as *he*, or to a different person, or to both;' Sledd, *Review of Whitehall, Structural essentials of English*; Loyd and Warfel, *American English in its cultural setting*; Roberts, *Patterns of English, Language*, 33: 267 (1957).

らく要素も、いずれも、ふつうの語順をもつ文 (S+V+C; S+V+O) においては、動詞の右側要素となり、その語型も、構文コンテキストを形成する型態的・構文的指標を与えない通格型<sup>18)</sup>をとっているからである。しかし、先にあげた文, These people made good engineers. (これらの人は立派な技師になった。) に対して, These people made good engineers out of these young men. (これらの人は、この若い人たちを立派な技師にした。〔直訳、若者から技師を作った〕) の文を考えてみる。この文でも、前の文と同じく、被規定素として made をとる。すると、この文では、前置詞句のもつ語彙の意味が作る意味規定の場——語彙コンテキスト——の働らきによって、被規定素 made の語彙の意味は、その自動詞的語彙意味の一つ、‘……作った’に規定されることになる。ここで逆に類推して、この前置詞句の欠除が、被規定素 made の他動詞的語彙意味を実現する構文コンテキストを作ると考えることは正しくない。例えば、文, These people made good engineers for these oil-field. (これらの人たちは、これらの油田の立派な技師になった。) においては、前置詞句 for these oil-fields の存在にも拘らず、被規定素 made は、‘……になった’という語彙の意味を実現しているからである。それゆえ、前の文, These people made good engineers. において、被規定素 made の自動詞的語彙意味の一つ ‘……になった’ が実現されるのに必要なことは、被規定素 good engineers が、補語と規定されることである、ということが、改めて確認される。しかし、規定素 good engineers を補語と規定するのに必要な意味規定力は、この被規定素 good engineers をこえた、「この文に登場する人物に関係がある場面」(NWD)、すなわち、「この文の要素, these people と good engineers は同一対象物 (同一人物) を指す」という外言語コンテキストに求められなければならない<sup>19)</sup>この種のコンテキストは、第1型構文コンテキストの一変種であり、我々は、このコンテキストを、〈第1型構文コンテキスト・語彙・場面拘束型〉と呼ぶことにする。従って、文, These people made good engineers. に対するコンテキストの分析を、(被規定素を made にとると)、「この文では、〈言行為の場〉を作る外言語コンテキストの働らきによって、初めて、規定素 good engineers 語型および構文型の作る構文コンテキスト、および、good engineers の語彙の意味によって作られる語彙コンテクが複合して働らき、被規定素 made の自動詞的語彙意味の一つ、‘……になる’が実現されている」と考えられる。すなわち、第一段階では、〈言行為の場〉として表われる外言語コンテキストによって、〈These people と good engineers が同一人物を指す〉ことが明らかにされ、これによって、語群 good engineers が目的語ではなく、補語であることが規定されてくる。すると、第二段階では、〈good engineers は補語〉という構文型が作る意味規定の場——構文コンテキスト——の働らきによって、被規定素 made の他動詞的語彙意味群は排除されて、その自動詞的語彙意味群が実現されてくる。第3段階では、good engineers と、被規定素 made の二要素が作る、それぞれの語彙の意味の相互排除・規定作用——語彙コンテキストの働らき——によって、被規定素 made が、この文においてもつべき正しい語彙意味、‘……になった’が実現されることになる。しかし、標準的な構文コンテキストの型態と機能の考察対象となる文、あるいは発話では、その文、あるいは発話を構成している内言語

18. O. Jespersen, *Essentials of English Grammar* (London, 1933, 1952 impr.) p. 138.

19. C. C. Fries, *Structure*, p. 191.

資料のみが作る構文型によって働らく意味規定力——語彙・構文コンテキストの機能——によって、当該被規定素の文法的、および語彙の意味の規定が行われるのが常である。ここで、構文コンテキストの基本的な型態と機能をみるために、*These people made mistakes.* (これらの人々は、あやまりをおかした。)の文を考えてみよう。被規定素を *made*にとると、まず第一に、被規定素 *made* の右側要素として前置詞句が存在せず、直接に *mistakes* が存在すること——構文コンテキスト——が持つ意味規定力、すなわち、規定素 *mistake* と被規定素 *made* が形成する構文コンテキストの機能によって、*mistake* は目的語と規定されてくる。次に、＜規定素 *mistake* が目的語という構文型式＞が、被規定素 *made* に対してもつ意味規定力——*mistake* の *made* に対する構文コンテキストの機能——によって、被規定素 *made* の自動詞の語彙意味群が排除され、その他動詞の語彙意味群が実現されてくる。第三には、規定素 *mistake* の語彙の意味が、被規定素 *made* の、今実現された他動詞の語彙意味群に働らいて作る意味規定の場——語彙コンテキスト——の働らきにより、被規定素 *made* のもつ他動詞の語彙意味群の中で、この文にあてはまる適切な語彙意味、‘おかした’が実現される。もちろん、この三つの構文、および語彙コンテキストの意味規定の作用は、今述べたように線条的ではなく、互に呼応して起る同時的連鎖反応に比せられるものであることに注意されたい。

## 6. 構文コンテキスト——第2型(2)——

先に、構文コンテキスト第1型で考察した *These people made good engineers.* (これらの人々はりっぱな技師になった。)の文が作る、場面・構文・語彙の三重の同時連鎖的コンテキストの意味規定の働らきの構図では、*made* を被規定素に固定して考察を試みた。しかし、考えられることは、このようなコンテキストの相互連鎖的な分析においては、被規定素自体が作る語彙・および構文コンテキストも考えられねばならないことは、意味規定作用が相互的・複合的なものであるという一般的考察からも当然考えられることである。それゆえ、被規定素のある語彙的、あるいは構文の意味の実現が行われる場合に、規定素として働らく要素として、被規定素自体の語彙・構文の意味および、その語型、構文型が作る意味規定の場——語彙・構文コンテキスト——が、それ自身の、ある特定の語彙の意味、および構文の意味の解明に働らく場合が考えられなければならない。すなわち、ある文、あるいは、ある発話の中で、ある被規定素の適切な意味を規定するのに必要な意味規定力が、被規定素自身がその文で持つ構文的使用条件によって作られる意味規定の場によって行われる場合が考えられる。このように、＜最小規定素が被規定素自身の構文的機能であるようなコンテキスト＞を、我々は、＜構文コンテキスト第2型＞と呼ぶことにする。

具体例から始めよう。イギリス英語では、*sick* は、連用的に補語として用いられたとき——構文コンテキストの形成——には、‘気持ちが悪い’、‘吐き気がする’の語彙の意味をもつ。*I feel sick.* (胸がむかむかする。); *He was very sick, and brought it again* (彼はひどい吐き気がしてそれを吐いた。)しかし、*sick* は、もし連体的に形容詞として用いられたときには、‘病気の’という語彙の意味が実現される。*on sick leave* (病気で休んで); *If she could be spared to come down and console a poor sick lonely woman.* (もし彼女がひまがとれて、可愛想な病気で孤独な婦人をなぐさめに来れるならば。)

次に形容詞 *ill* を被規定素に取って考えてみる。*ill* は連用的に、すなわち補語として用いられたときは、‘病気の’の語彙的意味を実現する。*He is ill.* (彼は病気だ。)しかし、連体的に用いられたときには、‘悪い’を意味することがある。*ill blood* ‘悪感情’; *ill humour* ‘下機嫌’。しかし、連体的機能では、*ill* は、今あげたような、非常に限られた用法しかもたない。そして、現在では、これらの場合にも *bad* が使われるのがふつうである。さらに *sick* については、上に述べた、連用用法——‘病気の’; 連体用法——‘気持ちが悪い’を通じてその基本的語彙意味、‘病気の’は、失われていないことが分る。そして、*sick* が連用的構文機能をもつときは、すなわち、*be+sick*, *Vb+sick*, あるいは *Vs+sick*<sup>20)</sup>の語群においては、*sick* は、*to vomit*; *to nauseate* (吐く、気持ちが悪くなる)の意味を表わす慣用語法<sup>21)</sup>だとも考えられる。*He was twice sick during the flight.* (彼は飛行中に二度気分が悪かった。)の例文が、*sick* ‘吐く’のえん曲語法<sup>22)</sup>と考えられるとすれば、*sick* の基本的語彙意味は、‘病気’から離れていないと考えられる。このことは、イギリス英語では、連用的に用いられたときには、*sick* は、‘病気の’の意味を実現する力を失っていないことによっても推測できる。また文、*He has been sick for these two weeks and can not be seen.* (彼はこの二週間病気で、姿が見えなかった。)にみられるように、アメリカ英語では、‘病気の’は、*sick* の基本的語彙意味であり、‘吐きそうな’、‘むかつく’の語彙の意味を *sick* は持っていないということも、この推測を裏づけてくれる。要約すると、*ill* の場合は、連用用法では、‘病気’ (*He is ill.* ‘彼は病気だ。’), 連体用法では、‘悪い’ (*ill manners* ‘無作法’)の語彙的意味をもつが、すでに述べたように、連体用法の場合には、現代英語では、*bad* におきかえられる (*bad manners*) ことが多い。それゆえ、*ill* の構文的用法 (連用、連体用法) が、一義的にはっきりと、*ill* 自身の語彙的意味、‘病気の’、および、‘悪い’と結ばれているとは言えない。従って、*ill* は、構文コンテキスト第2型 (被規定素の語型、および、構文型が、それ自身の語彙的意味を規定する意味の場) を純粹な形で構成しているとは言えない。

また、*sick* も、たしかに、連用用法では、まえにみたように、‘吐き気がする’という意味になる (*I am going to be sick.* ‘吐きそうだ’) が、アメリカ英語では、イギリス英語と同じく、‘病気’という語彙的意味をもつことになる。 (*He is sick.* ‘彼は病気だ。’) それゆえ、*sick* のばあいにも、*ill* におけると同様に、連用、連体用法に対応して、一義的に、相異なる語義が実現されてはいないと言えよう。従って、*sick* も *ill* と同様に、厳密な意味での構文コンテキストの純粹型は作らないと言えよう。

次に、形容詞 *late* を被規定素として含む次の語群が作るコンテキストを考えてみよう。

1. *The late prime minister* (故首相). この語群で被規定素を *late* にとると、この *late* の語彙意味、①おくれた; ②最近死んだ、故……; ③近頃の、等の語彙意味のうち、②‘最近死んだ’、‘故……’の語彙意味が被規定素 *late* に実現されるのは、この語群を構成している *late* 以外の要素 *prime minister*, *the* の語型、あるいは構文型によって作られる意味

20. Paul Roberts, *English Syntax*, 1964, p. 61.

21. N. N. Amosova, "Word and Context," (in Russian) *Transactions of Leningrad University*, 243: 17 & passim (Leningrad, 1958).

22. N. N. Amosova, "On Syntactic Context," (in Russian) *Lexicological Researches*, 5: 42 (Moscow, 1962).

規定の場——語彙・構文コンテキスト——の働きによるのではなくて、被規定素 *late* 自身が、この語群の中で獲得するある種の意味規定機能によるものと考えられる。多くの例についてみると、被規定素 *late* がある語群、あるいは文のなかで、‘最近死んだ’、‘故……’の語彙的意味を実現するのは、〈人を表わす名詞の左側要素として *late* が表われる場合<sup>23)</sup>〉に限ることが分る。〈人を表わす名詞〉とは、フリーズのいう〈Frame B で The に接続する右側要素〉と言いかえることもできる。2. それゆえ、もし、被規定素 *late* の右側要素が、〈時間の断片を表わす（あるいは、時間の断片の意味で用いられる）普通名詞〉である場合には、被規定 *late* は、‘遅い’を表わす。例：*late (spring)* (晩春)；*The night was late.* (夜はふけていた。); *It is too late for the express.* (急行にはもう間に合わない。) 3. また、被規定素 *late* が、〈時間以外の語彙的意味をもつ名詞、および、人を表わす普通名詞を右側要素としてもつ場合〉は、‘間に合わない’を表わす。*late commer* (遅参者)；*late repentance* (間に合わない後悔)。 *late commer* の場合には、‘故人の’の意味は、外言語コンテキストとして表われる〈話しの場〉による意味規定力か、あるいは、この語群を、その中の一要素として含む文、あるいは発話の作る構文・語彙コンテキストによって排除される。従って、ここで一般論として言えそうなことは、被規定素 *late* が‘故……’を表わすのは、*late* の右側要素が個有名詞を表わすばあいによくみられる、ということである。*the late Dr. Brown* ‘故ブラウン博士’。

*late* の場合と同種の現象は、被規定素として取られた *certain* の場合にもみられる。*certain* は、連用の用法においては、‘(確実な智識に基いて) 確信して’、‘疑いなく’の語彙的意味を実現する。例：*He is certain of the correctness of his view.* (彼は自分の意見の正しいことを確信している。); *I am certain that it is so.* (私は確かにそうだと信じている。) しかし、*certain* は、連体的に用いられると、‘確実な’あるいは、‘ある’の語彙意味を、内言語コンテキスト (構文・語彙コンテキスト)、あるいは、外言語コンテキスト (話しの場) に助けられて実現することになる。例：*certain evidence* (確かな証拠)；*a certain person* (ある人)。

被規定素として、我々は、*ill*, *sick*, *late*, *certain* をとり、これらの語の連体、連用の構文的使用条件によって作られる構文コンテキストが、それ自身の語彙的意味を規定する場合を見てきた。しかし、ある被規定素が、それ自身の語彙的意味の規定力をもつ構文コンテキストを形成するのは、当該被規定素の連用——連体の対立の場合にのみ限るわけではない。例えば、被規定素を *pretty* にとって、次の文を考えてみよう。④ *She was a very pretty woman.* (彼女は大変きれいなひとだった。); ⑤ *She is pretty.* (彼女はきれいだ。) 被規定素 *pretty* は、この④、⑤二つの文の間では、連体的形容詞用法と、連用的述語用法の差異をみせているが、今まで考察してきた語、*late*, *certain* に見られるような、語彙的意味の差異は見られない。しかし、⑥ *He was wounded pretty badly.* (彼はかなりひどく怪我した。) や、⑦ *I'll take pretty good care of you.* (ずいぶんよく世話してあげましょう。) のような文では、被規定素 *pretty* は、副詞として用いられ——構文コンテキストの形成——その語彙的意味は、④、⑤の文に見られる‘きれい’とは異なる、‘かなり’、‘十分に’が実現されてくる。それゆえ、被規定素 *pretty* の場合は、先に論じた *late*,

23. 'The clerk remembered the tax.' C. C. Fries, *Structure of English*, 1957, 1961<sup>3</sup>, p. 75.

certain のばあいと異なり、連用——連体の構文型によって構文コンテキストが形成されるのではなく、連用・連体——対一副詞という構文型の対比によって形成される構文コンテキストの形成が考えられる。被規定素としてとられた時、この pretty と類似の型態の構文コンテキストを作る語の一つとしては、very があげられよう。④ I have been very busy. (私は非常に忙がしかった。) ⑤ The room was crowded to the very door. (部屋は戸口までぎっしりと詰めこまれていた。) ④ の文においては、被規定素 very は、形容詞 busy を head-word とする tail-head 語群の中で busy の修飾語として用いられ、‘非常に’という程度を表わす語彙意味を獲得していると言えよう。また、文 ⑤ においては、被規定素 very は、名詞 door を head-word とする tail-head 語群において、連体的な限定詞として用いられ、強勢の副詞の語彙意味、‘全くの’を実現している。

それゆえ、ある被規定素の構文的機能が、それ自身の語彙的意味に対する意味規定の働きを見せる——第2型構文コンテキストの機能が見られる——場合には、この構文コンテキストは、ほとんど常に、その被規定素の語彙的意味が作る語彙コンテキストと結ばれている。それゆえ、この語彙コンテキストの助けがなくては、被規定素自身の構文コンテキストのみでは、当該被規定素の語彙的意味は実現されえないと言えよう。それゆえ、被規定素自体の構文的機能——構文的使用条件——が、被規定素自身の語彙的意味を規定するという絶対な形での第2型構文コンテキストは、厳密に言えば、少なくとも英語に関する限りでは見られないと言えよう。それゆえ、第1型、および、第2型構文コンテキストを通じて言えることは、① 純粋な構文コンテキストは、非常にまれにしか見られない。② 最も広く見られる構文コンテキストは、語彙・構文融合コンテキストである。③ ある被規定素のある語彙的意味を規定する構文コンテキストは、実現される被規定素の語彙的意味によって、ある一定の結合の型(連用——連体型; 連用・連体——副詞型、等)にまとめることができる。しかし、この構文コンテキストの結合型式は、次の二つの理由によって、相対的にのみ厳密なものである。まず第一に、被規定素である語、あるいは語群<sup>24)</sup>の構文的用法——構文型——は非常に多様なので、すなわち被規定素の構文型は非常に多様なので、これら被規定素の構文型によって作られる構文コンテキストの型も、また、固定した体系を中核としているとはいえ、変動する振幅が大きい。第二に、現実の発話あるいは、文においては、それぞれの場合において基本的と考えられるコンテキストの結合型式が、当該被規定素の修辭的な用法、新語彙の創造、文、あるいは発話の一部が場面によって省略されること等の干渉作用によって破られる。そしてまた、ある文、あるいは発話が行われる話しの場——外言語コンテキスト——の働きは、当該被規定素を含む内言語資料によって作られた、ある構文コンテキストの型態に変更を加えるかも知れない。例えば、次の文で、動詞 make を被規定素にとってみる。I made her go. (私は彼女を行かせた。) この場合には、規定素の語群 her go が、「目的格

24. H. Whitehall, *Structural Essentials of English*, 1958, p. 11.

25. 'sentences such as (1) [Colorless green ideas]sleep furiously.] 'might' be uttered in some sufficiently far-fetched context.' (N. Chomsky, *Syntactic Structures*, 1962, p. 16). 次のような 'far-fetched' なコンテキストでは instead of は、主語としての働らく。Is "instead of," for instance, to be considered one, two, or three words? (W. N. Francis, "Revolution in Grammar," in *Aspects of American English*, 1963, p. 29).



名詞+to なしの不定詞」という構文型をとっていることによって作られる意味規定の場——構文コンテキスト——の働らきによって、被規定素の語彙意味「……にさせた」が実現されている、とまとめられよう。しかし、ふつうは、(私は彼女を作った。)の意味を表わしている文、I made her. は、次のような、この文全体を、その中の被規定素語群とするより広い発話の中では、I made her to go の意味を獲得することになる。She is gone off alone. I made her, though she wanted to stay. (彼女は一人で出かけた。彼女は居たがったけれども、私は行かせた。) 次の文も、今あげた場合と同じく、被規定素 make の使役的語彙意味、「……させる」の実現は、made を含む文を、その中の一要素とする広い内言語コンテキストによって行われている。If you don't stop chattering, I shall take drastic steps to make you. (もし君がおしやべりをやめないならば、やめさせるために思い切った処置をとるよ。)

それゆえ、語彙・構文コンテキストは、非常に変容され、切断された形で表われることが分る。そして、そのような場合には、その被規定素を含む、直接的な話しの場面、あるいは、その文をとりまく間接的な話しの場面(言語による描写によって提示される場面)が作る意味の場——外言語コンテキスト——の機能が、当該被規定素の適切な語彙意味を実現させることになる。それゆえ、構文コンテキストは、しばしば、場面・構文融合型コンテキストとして表われることもあると言える。

現実<sup>26)</sup>に発話に関連して言えば、コンテキスト論には今一つの問題がある。我々は、主として、考察を、文と、その中の一要素の語彙の意味の実現に限り、その語彙意味が実現される要素を「被規定素」、その被規定素の当該語彙意味の実現に必要な(最小)の意味の場——意味規定力を顕在化させる語型・構文型の複合体——を作る要素を「規定素」と定義した。本稿においては、次に、被規定素、規定素ともに、それらが主として語である場合に考察を限り、被規定素としてとった、ある一語の語彙の意味の実現のためのコンテキストの型態と機能を追究してきた。しかし、現実のある発話とか文の意味規定の場の分析にあっては、被規定素の語彙・構文意味の実現に働らく意味規定力を作るある語、あるいは語群を、最小規定素として、はっきりとりだせない場合が多い。現実の発話では、コンテキストの機能は、一つの語(群)から他の語(群)に働らくばかりでなく、その一つの語(群)から、同時に、いくつかの語(群)に、直接的に、あるいは、These people made good engineers. の分析に見られたように、中間的なコンテキストの連鎖を通して働らいて行く。このようなコ

26. 'The Conception of context', writes Malinowski, 'must burst the bonds of mere linguistics and be carried over into the analysis of the general conditions under which a language is spoken ..... The study of any language, spoken by a people who live under conditions different from our own and possess a different culture, must be carried out in conjunction with the study of their culture and of their environment.' (S. Ullmann, *Semantis*, 1962, p. 50).

'This widening of context, linguistic and non-linguistic, has opened new horizons for the study of meaning. What we have to aim at is a "serial contextualization of our facts, context within context, each one being a function, an organ of the bigger context and all context finding a place in what may be called the context of culture.' (ibid., p. 51. & J. R. Firth, *Papers in Linguistics*, 1957, p. 32).



ンテキストの連鎖的機能を詳細に見てゆくと、ある語（群）が、他の語（群）との関係において、規定素としてばかりでなく、同時に、被規定素としての意味規定関係をもっていることが分る。例えば、次の文を考えてみよう。The cutter moved a paradoxical solution of the issue.（〔採掘坑夫の〕先山は、その問題の逆説的な解決を提案した。）実際の分析では、この文では、ほとんどすべての語が、被規定素であると同時に規定素として表われ、相互に複合的な語彙・構文コンテキストを形成していると考えられる。

まず被規定素として、動詞 moved をとると、この動詞は、‘提案する’、‘提起する’を意味すると解される。しかし、被規定素 moved の語彙意味の実現は、すでに、I can not make him understand me.（私は彼等に私の言うことを分らせることができない。）の分析で見たように、直接目的語 solution の存在によって作られる構文コンテキストと、この直接目的語の語彙意味によって作られる語彙コンテキストの働きによって行われている。それゆえ、被規定素を moved、規定素を solution とした場合に、moved a solution の作るコンテキストの型態は、語彙・構文コンテキストであり、最小規定素は、目的語 solution であると言えよう。しかし、最小規定素として働らく、この solution が、被規定素 moved に対して作る語彙コンテキストは、この solution の語彙意味の一つ、‘解決’を、その型成の契機とする筈である。それゆえ、ここでさらに、made に対しては規定素として働らいた、この solution の語彙意味を、‘溶液’、‘溶解’ではなく、この文中での正しい意味‘解決’に規定するのは、この solution の右側要素 paradoxical のもつ語彙意味が作る語彙コンテキストの働きによるものと考えられる。それゆえ、語群 moved a paradoxical solution について観察すると、solution は、moved に対しては規定素として、語彙・構文コンテキストを作るが、paradoxical に対しては、被規定素の関係に立ち、規定素 paradoxical の語彙コンテキストによって、‘溶液’、‘溶解’ではなくて、与えられた文において適切な‘解答’という語彙意味が実現されることになる。与えられた文、The cutter moved a paradoxical solution of the issue の文について、さらに考察を進めると、solution は、moved に対して規定素として働らいているばかりでなく、その右側要素の of the issue に対しても、また語彙コンテキストを作り、規定素として働らく、語群 of the issue を作っている実体語（名詞）issue の語彙意味のうちで、この文に不適切なすべての語彙意味（‘結末’、‘発行’、‘子孫’等）を排除し、この文中での、issue が獲得する正確な語彙意味‘問題’を実現している。

次に、この文で残された二つの要素、cutter と paradoxical について考えてみよう。先に、この文で、solution の語彙意味を、‘溶液’ではなくて、‘解決’に規定するのは、solution の右側要素 paradoxical の作る語彙コンテキストであると述べた。ここで再び、語群 paradoxical solution について考えてみると、まず、paradoxical には二つの語彙意味① 逆説の；② 奇弁を口にする、がある。paradoxical のこの二つの語彙意味のうち、① 逆説の、が実現され、② 奇弁を口にする、が排除されるのは、今度は逆に、被規定素 solution の語彙意味が規定素となって、被規定素 paradoxical に対する語彙コンテキストを作るからだと考えられる。細かく見ると、このばあいには、規定素として働らく名詞 solution は、そのすべての語彙意味の中に、‘人’を表わす語彙意味を含んでいないので、被規定素 paradoxical の語彙意味のうち、② 奇弁を口にする、が排除されることは容易に分る。

次に、主語 cutter について考えてみよう。まず、cutter を被規定素にとると、規定素として働らく要素は、cutter の右側要素の動詞 moved であろう。もちろん、cutter の構文意味を‘主語’に規定するのは、cutter の左側要素として表われる冠詞 The を含む、この文全体に含まれる構文的指標が作る構文コンテキストである。それゆえ、被規定素 cutter は、cutter を含む文全体の内言語資料が規定素として働らいて作る内言語コンテキストが、まず構文コンテキストとして働らいて、cutter の構文意味を、‘目的語’や‘補語’にではなく、‘主語’として規定していると言えよう。同時に、動詞 moved が、規定素として cutter に働らき、規定素 moved の語彙意味（提案する）が作る語彙コンテキストによって、被規定素 cutter の語彙意味のうちで、無生物を表わす‘裁断器’、‘穿岩機’、‘カッター（軍艦付属のオールを備えた雑役艇）’等の語彙意味は排除される。

ここで、この文のコンテキストの分析を振返って見ると、cutter の、不適切な意味の排除に至る意味規定作用の連鎖は、結局は、語群 moved a solution が作るコンテキストの意味規定の分析に、その源を発している。始めに、コンテキスト分析は、moved からその右側要素（a paradoxical solution of the issue）に至り、また同時に、moved の左側要素 The cutter に及んでいる。そして、今見てきたような、相互連鎖の複合的な規定——被規定の語彙、および構文コンテキストの働らきによって、初めて、cutter の構文意味‘主語’の実現と、その無生物を表わす語彙意味の排除が可能となった。しかし、最後に、この文における語 cutter の適切な語彙意味を、この語の‘人間を表わすいくつかの語彙意味’から取り出すためには、cutter をも含めた、この文の各要素の作る語彙コンテキスト、および構文コンテキストの意味規定力のみでは十分でない。それゆえ、この場合に、被規定 cutter の語彙意味を、‘彫刻師’、‘裁断師’、ではなくて、‘〔採掘坑夫の〕先山’に一義的に決定する意味規定力は、言語資料で構成される内言語コンテキストにではなく、この文を取り巻く話し場——外言語コンテキスト——に求められなければならない。また、話し場には、間接的に言語資料によって与えられる場合（*She is gone off alone. I made her, though she wanted to stay.* ‘彼女は一人で出かけた。彼女は居たがったけれども、私は行かせた。’）と、あるいはまた、今の例のように、直接的に、＜この文が *Daily Worker* に掲載された、鉱夫の会合についての報道文の一部である＞という外言語的状况によって与えられている場合、の二つの変種が考えられる。我々は、非言語資料によって与えられる直接的な話し場を、第1型外言語コンテキスト、また、言語資料によって述べられた形で、間接的に与えられる話し場を、第2型外言語コンテキストと呼んだ。そして、この第1、および第2型外言語コンテキストは、時には、内言語コンテキストと同時に働らき、内言語コンテキストの意味規定力を補う働きをする、とまとめられよう。それゆえ、内言語コンテキストに続き、それを取り巻く外言語コンテキストの型態と機能が、今後のコンテキスト論の主要な課題となろう。

## Résumé

### Structure of Context

Shoichi Okabe

This is the sequel of the present writer's research into the forms and functions of the context with a view to probing into its mechanism for the clarification of a particular lexical and/or structural meaning.

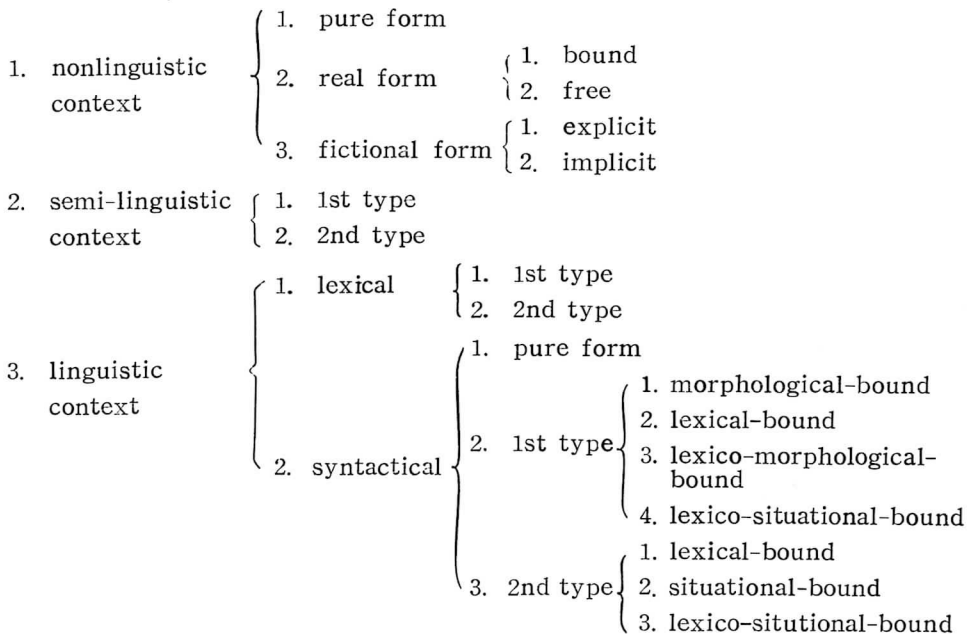
It is a common knowledge that words are almost always found embedded in specific contexts, and that one favorite technique for determining the meanings of unknown words is formally known as finding meanings from context. However, for some reasons, perhaps including the lack of a unifying theory of meaning and the scarcity of literature on the subject, the study of context has remained below the threshold of linguists' consciousness, with the result that the concept of the context and its mechanism in the actualization of a particular meaning are among the least explored part of linguistics. Nevertheless this apathy has gradually changed into apprehension as is evidenced from professor Fries' verdict, 'Structural meaning is not a vague matter of context, so called.' to professor Bach's vindication, 'It is important to take into account the significance of linguistic and nonlinguistic context.'

American College Dictionary defines context as 'the parts of a discourse or writing which precede or follow, and are directly connected with, a given passage or word.' Another meaning of context, to quote Webster's New World Dictionary, is 'the whole situation, background, or environment relevant to some happening or personality.' Accordingly it is easy to see that the total context falls apart into two variants in terms of its constituent materials: the linguistic context is composed of speech sound, written or spoken, whereas the nonlinguistic context is constructed with every object and happening that surrounds the linguistic context. Placed in the frame of Bloomfieldian analysis of the communicative acts the linguistic context conceivably corresponds to the act of speech, and the nonlinguistic context may probably find its counterpart in 'practical events.'

Since the linguistic context presupposes a scientifically accurate knowledge of the whole of human experience, the analysis of the linguistic context presents itself as a more moderate enterprise. The linguistic context has lexical and syntactical subdivisions in its mechanism for the clarification of a particular lexical and/or structural meaning of a certain element of a given discourse or utterance. Lexical context is that part of utterance or discourse whose lexical meaning is necessary for the clarification of a particular lexical

and/or syntactical meaning of a given element; and the syntactical context is that part of utterance or discourse whose syntactical meaning help clarify a specific lexical and/or syntactical meaning of a given element. Through both these contexts the necessary part for the realization of a particular lexical and/or syntactical meaning of a given element is defined as 'the determiner', and the part of utterance or discourse whose lexical and/or syntactical meaning is realized is in its turn defined as 'the determined'. This dichotomy of operational units of the determiner versus the determined is a duplicate of Saussurean 'signifiant' and 'signifié' duality, though they are quite wide apart both in concept and practice.

In this paper the present writer has confined his analysis of the context to the domain of the sentence, with occasional referene to the connected discourse in so far as this is unavoidably called for in the analysis of the sentence in question. And a tentative diagram of a system of the whole context with its ramified subdivisions was obtained that follows.



\* This work was supported in part by Scientific Research Aid in Grant. (No. 13160)